

秋篠寺と伎芸天像

奈良、秋篠寺（あきしのでら）は宝龜十一年（七八〇）光仁天皇の勅願に依つて善珠僧正の創立、藥師如来を本尊とする寺院であるが、伎芸天使もこの寺の創建の頃、他の多くの仏像とともに造顯されたものと思われる。

★秋篠寺縁起

宝龜十一年（七〇）光仁天皇の勅願に依つて善珠僧正の創立、薬師如来を本尊とする寺院であるが、伎芸天像もこの寺の創建の頃、他の多くの仏像とともに造顯されたものと思われる。

しかしその後、平安時代の末、一三五年兵火のために金堂等が焼失した際、この伎芸天像も御首部を残し御胴体が大きく破損し、鎌倉時代に於いて再び御胴体が造られ現在のお姿を見るに到つた。したがつて現在のお像は御首部だけが奈良時代の作（乾漆造）であり、御頸部以下御胴体は鎌倉時代の作（寄木造）であるが、ともにきわめて写実的な作風をもつて全体が統一され、かすかに動きはこの天女像の大きな特色である。昨年七月十三日筆者終戦後久しう振りに菩提樹の花咲く同寺を訪い詳

ある時天上では、大自在天王（シバ神）が大勢の天女たちにかこまれて、天界の音楽や踊りを楽しんでいた。すると忽然として大自在天王の髪の生え際から一天女が生れ出た。

その容姿の端麗なことはもとより、伎芸に秀でていることは、並いる天女達の遠く及ぶところではなかつた。居合わせた天人天女達は一斉にその勝れた才能を称えて、彼の天女を伎芸天と呼んだ。伎芸天は、多く集つた天人天女達の中に立つて、「もし、世に祈りをこめて田畠の豊作や、人生の幸せや、家庭の裕福などを願う者があれば、私がその願いをことごとく満足させよう、また学問や芸術に関する願いを寄せる者にはその祈願をすみやかに成就させよう」と語った。（漢訳密教典「伎芸天念誦法」より転載）

追記 従来、この伎芸天像に宝冠はなきものと知られて來たが、今回計らずも泉大津市正木美術館に之が

蔵されていることが教えられた。宝冠は木彫極彩色、在銘あり、創建年数逆のぼること十年前秋篠王がこの像を奉持したものということである。将に古美術学界の新発見とも見られ
る。

扁

昭和二年の挨拶状 嶋内義治



回想斷片

岡本

志良

黒塗りの自動車が着いて玄関を入られるお家さんのお姿、時々廊下で云つて直立不動の姿勢で見送った全

に愉快に騒げるものかと思つた。恐らく他から聞けば酒の出た宴会と感じたにちがいない。これも若き日の

その頃の店は宇治川にあり、毎朝宇治川沿いに朝臭（浅草）通り一糞車が集中的に通つた→を歩いて通つた。建物は当然焼打後のバラックで暗い感じの古いものであつた。しばらくして居留地にあつた国際汽船へ効勤を命ぜられた関係もつて、

宇治川の店は漠然としか覚えていない。割合はつきり覚えているのは最初から助勤に出されたことで、やはり自分は成績も悪く体も小さいため

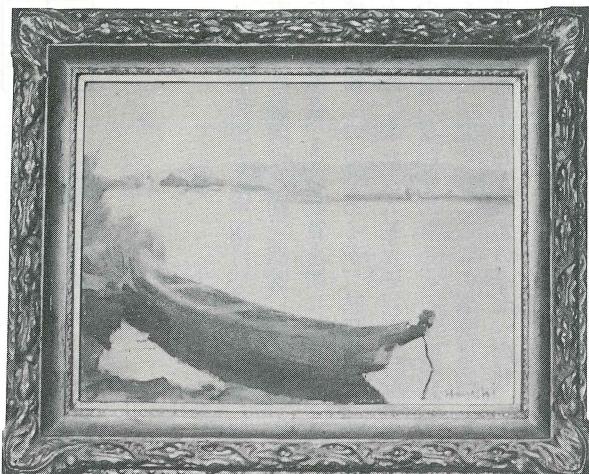
居留地から去ったのは昭和二年（一九二七）であるから、在店は七十年生存の一割七年でしか当らない。しかしこの期間は少年から兵隊検査を過ぎる青年までの成長期であつて重要な時期であった。更に神戸を第二の故郷と信じていた私にとって、この離別は深刻なものがあり、諦めきれない思いがしたものである。

在店七年の大半は未成年時代であった。少年とは云え一騎当千の傑物多くそれぐ個性があつて仲々優秀な人材を集めたものであつた。それだけに日常生活にも真剣さがあり、男子一度郷閥を出さればの感があつて、暗黙裡の競争が行われていたようである。

酒も煙草も五十年半世紀の輝かしい歴史を持つ訳であるが、もつと一つの事に傾注していくなら何かを仕出かしているはずである。惜しいことをしたものである。

恋心と勉学

忍心と免責 丁度少年から大人になる時期に在店したのだから、少し位の浮いた話があつても不思議ではない。内氣で消極的性格の自分にもいくつかの思出があつたが、総じて降つては消える淡雪のようなものであつた。更にプラトニックラブを賛美して恋は神聖であるべきだと考えていた時代で



▲林武画伯若年の作品(大正六年)

考えて少々行き過ぎの感じがない
でもない。しかし給仕される我々に
とつては好都合であつて、大変楽な
こと、炊事軍曹と云われる主任さん
の監視の眼を感じなくてよいことな
どの他、たまには好意の表現として
女の子から二重配給があつたりして
楽しいものであつた。

(当時はこういつたと思う)を觀るために六甲越えで歩いて行つたもので、これも恋愛心理の変形として女の神秘的な存在を感じたものであつた。最後につけ加えておきたいのは眞面目に恋を感じたことが一回だけあつた。それは閉店後神戸を離れてから間もなく思いがけない女の子からの切実な恋文であつた。心を動かされたが、結婚の資格不充分として謝絶した。その後便りは全くないが、今でもその人の幸福を祈つてゐる。成長の時期を恋愛に終始したと誤解されることを恐れ、勉学に努めたことも附記したい。

入店後いやその前から勉学の必要は知つていたが、いよいよ高等教育

もあつたので、花咲く恋愛はある筈
がなく、今の若人から見れば想像外
のことであろう。しかし周囲や世間
の眼をはばかりながら何人かでピク
ニックや海水浴に行つたり馬鹿話を
したことが、結構楽しいものとして
残つている。勿論対象は店の女の子
であつて、それ以外の娘は遠く垣根
を距てた存在であつた。お店へ通う
道で学校へ行く女学生に出会つたが、
毎朝所も名も知らぬ奇麗な娘に会う
のを楽しみに時間はかゝって出かけ
のちのやう。又夏服のうな次刊

炎焰島旅行の苦悶

(当時はこういったと思う)を観るため六甲越えで歩いて行つたもので、これも恋愛心理の変形として女の神秘的な存在を感じたものであつた。最後につけ加えておきたいのは眞面目に恋を感じたことが一回だけあつた。それは閉店後神戸を離れてから間もなく思いがけない女の子からの切実な恋文であつた。心を動かされたが、結婚の資格不充分として謝絶した。その後便りは全くないが、今でもその人の幸福を祈つてゐる。成長の時期を恋愛に終始したと誤解されることを恐れ、勉学に努めたことも附記したい。

入店後いやその前から勉学の必要は知つていたが、いよいよ高等教育

を受けた先輩諸兄の中に入つてみて
尚更学力の不足を感じ、一日も早く
一人前の店員になろうと勉強に努め
たことは事実である。幸お店の手厚
い教育方針又諸先輩の激励によつて
夜学に学び或は自ら進んで検定試験
をとるなど努力が報いられてか或程
度アシスタンントとしての能力を具え
たと思っている。この短かいながら
若い日の勉強は店の伝統的精神と相
まって、一種の不動の信念らしきも
のが育ち、その後の世渡りに役立つ
ここに喜んで思つてゐる。

覚悟を決めて歩きはじめたが、仲摶らず疲労は重つて来る、行手の岬を越せば湾を距てて新らしい岬が見え、これを越せば又見えると云つた具合で精神的にも参り、隊列も伸び困乱したようと思つてゐる。日も暮れ体力も愈々限界を越える頃明石の対岸岩屋に着くことが出来た。海峡横断の船をやつとのことで出しでもらい、倒れるように魚でベタベタするトロール船の船倉に乗りこんだ。海底に舟底がたたきつけられるような大揺れも束の間、死んだように眠つてしまつた。起こされて外を見れば静かな明石港内の赤い港内ブイの灯が見えて、ア、死な、いで着いたと思つた。

三十キロ、海岸線に沿つた道は岬と
湾が交互に入りこんでいるので実際
は四十キロ位はあつて、既に十キロ
以上歩いているから殆んど不可能に
近いと考えられた。しかしこの大勢
(多分三十乃至四十名と思う)の店
の者が明日曜日に出勤しなかつた場
合お店に与える影響は大きく、又登
山会にもお叱りがあつて大問題に発
展する恐れがあるので、参加された
先輩とも相談の結果徒步決行となり、
女人の人や足弱の人には荷車を雇い出

食堂の思い出

内容がよいと言うことであつた。極貧ではないが裕福でもない田舎の家庭料理から見れば毎日魚や肉が出て大変ご馳走であつた。初めて国へ帰つてこの事を話し父母が喜んでくれた記憶がある。居留地へ移つてからの食堂は一階の奥に広い面積の室が当たられ、炊事室から離れた反対側の隅に重役さんの席がありその他は細長く何列かテーブルが並んでいて、休の日以外は三食ともここで食つた。炊事室の渡し口で副食物を受け取り自由な席で腹一杯食つたものである。一時女の子が昼食時だけ副食を丁度ウエイトレスのように各人に運んでくれた時代があつた。何故こうなつたかは知らないが、今から

から記念すべき最後の旅行であつたと印象に残る次第である。

爾来半世紀、二十才を越えたばかりの青年は今は古稀を迎へ、長い人生を歩んできた訳である。鈴木商店を離れて東京（藤倉憲吉さんの店）に一年、続いて大阪に戻り油屋に一年又東京に出て会社勤め（十一年、石油採掘会社、この間ソビエト領樺太の現場に七年）の後、脱サラを決意し当時の南支那広東に渡航し商業白営（五年余）終戦間際の五ヶ月間間に召し現地除隊の上三十一年日本に引

覚悟を決めて歩きはじめたが、仲摶らず疲労は重つて来る、行手の岬を越せば湾を距てて新らしい岬が見え、これを越せば又見えると云つた具合で精神的にも参り、隊列も伸び困乱したようと思つてゐる。日も暮れ体力も愈々限界を越える頃明石の対岸岩屋に着くことが出来た。海峡横断の船をやつとのことで出しでもらい、倒れるように魚でベタベタするトロール船の船倉に乗りこんだ。海底に舟底がたたきつけられるような大揺れも束の間、死んだように眠つてしまつた。起こされて外を見れば静かな明石港内の赤い港内ブイの灯が見えて、ア、死な、いで着いたと思つた。

大切にすれば永遠である。あの偉大
だつた鈴木商店も節制をして今まで
生きていてほしかつたと残念でたま
らない。

有馬旅行と閉店

食うことに関心が深かったのか、つい／＼食堂のことを書いてしまつたが、思えば成人した五体の骨肉はこの食堂に負うところが大きいと感謝せねばならない気持である。

淡路島旅行の苦闘

を受けた先輩諸兄の中に入つてみて
尚更学力の不足を感じ、一日も早く
一人前の店員になろうと勉強に努め
たことは事実である。幸お店の手厚
い教育方針又諸先輩の激励によつて
夜学に学び或は自ら進んで検定試験
をとるなど努力が報いられてか或程
度アシスタンントとしての能力を具え
たと思っている。この短かいながら
若い日の勉強は店の伝統的精神と相
まって、一種の不動の信念らしきも
のが育ち、その後の世渡りに役立つ
ここに喜んで思つてゐる。

と思つたことを記憶している。こんな大木が倒れる訳がないと信じていたからである。今から思えば余りにお店の内情に暗かつたものだと自分自身をなきけれどなく思う次第である。

しかし噂は現実となつて現われ、私は第一回の解雇組に入り暫く登山会の旅行中にこの悲しい噂を聞いたこと

昭和二十六年愛知県岡崎市の会社（益子史朗さん経営）に職を得て廿ラリーマンに戻り二十年勤めて退職し現在に至っている。幸この会社は順調に発展したので、最小限食う心配のない余生であることは、誠に幸運だつたと感謝している。

今後どれだけ生きられるか、先の短かいことは確実である。早く死にたいとは思わないが、無理に長生きしたいとも思わない。人には勝てないのだから。しかし企業には寿命はない

から記念すべき最後の旅行であつたと印象に残る次第である。

爾来半世紀、二十才を越えたばかりの青年は今は古稀を迎へ、長い人生を歩んできた訳である。鈴木商店を離れて東京（藤倉憲吉さんの店）に一年、続いて大阪に戻り油屋に一年又東京に出て会社勤め（十一年、石油採掘会社、この間ソビエト領樺太の現場に七年）の後、脱サラを決意し当時の南支那広東に渡航し商業白営（五年余）終戦間際の五ヶ月間間に召し現地除隊の上三十一年日本に引

覚悟を決めて歩きはじめたが、仲摶らず疲労は重つて来る、行手の岬を越せば湾を距てて新らしい岬が見え、これを越せば又見えると云つた具合で精神的にも参り、隊列も伸び困乱したようと思つてゐる。日も暮れ体力も愈々限界を越える頃明石の対岸岩屋に着くことが出来た。海峡横断の船をやつとのことで出しでもらい、倒れるように魚でベタベタするトロール船の船倉に乗りこんだ。海底に舟底がたたきつけられるような大揺れも束の間、死んだように眠つてしまつた。起こされて外を見れば静かな明石港内の赤い港内ブイの灯が見えて、ア、死な、いで着いたと思つた。

三十キロ、海岸線に沿つた道は岬と
湾が交互に入りこんでいるので実際
は四十キロ位はあつて、既に十キロ
以上歩いているから殆んど不可能に
近いと考えられた。しかしこの大勢
(多分三十乃至四十名と思う)の店
の者が明日曜日に出勤しなかつた場
合お店に与える影響は大きく、又登
山会にもお叱りがあつて大問題に発
展する恐れがあるので、参加された
先輩とも相談の結果徒步決行となり、
女人の人や足弱の人には荷車を雇い出

む
す
ゞ

昭和二十六年愛知県岡崎市の会社（益子史朗さん経営）に職を得て廿ラリーマンに戻り二十年勤めて退職し現在に至っている。幸この会社は順調に発展したので、最小限食う心配のない余生であることは、誠に幸運だつたと感謝している。

今後どれだけ生きられるか、先の短かいことは確実である。早く死にたいとは思わないが、無理に長生きしたいとも思わない。人には勝てないのだから。しかし企業には寿命はない

から記念すべき最後の旅行であつたと印象に残る次第である。

爾来半世紀、二十才を越えたばかりの青年は今は古稀を迎へ、長い人生を歩んできた訳である。鈴木商店を離れて東京（藤倉憲吉さんの店）に一年、続いて大阪に戻り油屋に一年又東京に出て会社勤め（十一年、石油採掘会社、この間ソビエト領樺太の現場に七年）の後、脱サラを決意し当時の南支那広東に渡航し商業白営（五年余）終戦間際の五ヶ月間間に召し現地除隊の上三十一年日本に引

覚悟を決めて歩きはじめたが、仲摶らず疲労は重つて来る、行手の岬を越せば湾を距てて新らしい岬が見え、これを越せば又見えると云つた具合で精神的にも参り、隊列も伸び困乱したようと思つてゐる。日も暮れ体力も愈々限界を越える頃明石の対岸岩屋に着くことが出来た。海峡横断の船をやつとのことで出しでもらい、倒れるように魚でベタベタするトロール船の船倉に乗りこんだ。海底に舟底がたたきつけられるような大揺れも束の間、死んだように眠つてしまつた。起こされて外を見れば静かな明石港内の赤い港内ブイの灯が見えて、ア、死な、いで着いたと思つた。

三十キロ、海岸線に沿つた道は岬と
湾が交互に入りこんでいるので実際
は四十キロ位はあつて、既に十キロ
以上歩いているから殆んど不可能に
近いと考えられた。しかしこの大勢
(多分三十乃至四十名と思う)の店
の者が明日曜日に出勤しなかつた場
合お店に与える影響は大きく、又登
山会にもお叱りがあつて大問題に発
展する恐れがあるので、参加された
先輩とも相談の結果徒步決行となり、
女人の人や足弱の人には荷車を雇い出